

実務翻訳

実務翻訳全体の動向をとらえ、横浜から世界を見つめる。

創業者だった父の後を継ぎ、ジェスコレーションを経営する丸山均社長は、日本翻訳連盟の常務理事を務め、また翻訳情報サイト「技術翻訳ステーション」も運営している。業界全体の事情に詳しい丸山社長に、実務翻訳の最新動向についてうかがった。

ジェスコレーション

株式会社ジェスコレーション <http://www.jescorp.co.jp/>
丸山 均 (まるやま ひとし) さん

1981年、大学卒業と同時にジェスコレーションに入社。88年、父の死去に伴い、代表取締役役に就任。その後の業容拡大に努め、現在に至る。近年ではアジア系言語を中心とする英語以外の翻訳業務にも力を注ぎ、また日本翻訳連盟の常務理事を務めるなど、業界全体の発展にも力を尽くしている。実務翻訳の最新事情はJESが提供する翻訳サイト「技術翻訳ステーション」<http://jescorporation.jp/>に詳しい。

実務翻訳業界を襲った3つの波

私がジェスコレーション（以下、JES）に入社した1981年当時は、日本のメーカーが製品を海外に輸出するための和文英訳が主流でした。それからわずか4年後、1985年の「プラザ合意」に始まった円高で輸出業は大打撃を受け、翻訳の流れも和文英訳から英文和訳に一気に変わりました。その英文和訳のブームも1990年の「日本経済のバブル崩壊」とともに訪れた、世界的規模での「コンピュータのダウンサイジング」により一気に収縮。しかしその後、米国から始まった新しいIT産業の隆盛により、再びブームが起きました。

それもつかの間、今度は2000年の「ITバブル崩壊」によりまたまた収縮。入社後の20年ほどで、実務翻訳業界は、実に3回の大きな転換期を迎えたことになりま
す。つまり翻訳業界をいうものは、地域経済でもなく、日本経済でもない、まさに
世界経済の動向に一番敏感に反応する業種なのです。

経済の激変からくる被害を最小限に食い止めるため、JESでは「和文英訳と英文
和訳」のバランスだけでなく、「取り扱い分野」と「言語の種類」のバランスに
も重点を置いています。したがって、他社に負けない得意の分野や得意の言語を
持っている間に、常に新しい分野・言語を開拓しておかねばなりません。「伝統
とは絶えざる革新の結果である」という言葉はまさに名言であり、真実だと思
います。

そして今押し寄せる第4の波

「ITバブル崩壊」から7年、今第4の波が押し寄せてきています。現在におい
てもWeb戦略は非常に重要なわけですが、今後は加速度的にその重要性が増して
いくと確信しています。質量ともに優れた情報をできるだけ新鮮なうちに発信
できるか否か、が企業に課された命題であり、世界的規模での「企業の格付け」
を検索エンジンが代行する、という時代がもうすぐそこまで来ていると感じ
ています。翻訳業界も決してその例外ではないでしょう。

また、日本では1円で株式会社を設立できる世の中ですから、今どき会社組織
である（登記してある）ということにどれほどの意味があるのでしょうか。まし
てや会社は有限責任、個人無限責任ですからなおさらです。翻訳会社は大量
翻訳プロジェクトの品質管理能力はもちろんのこと、安定的な営業力を
持続させる能力を持たなければその存在の意義自体を問われかねません。
そのためにもWeb戦略は決定的な鍵を握ると考えます。

翻訳業界の雇用情勢

昨年10月に私が調べたところでは、全国の翻訳会社の数は1983社でした。（参考→<http://jescorporation.jp/list/list.html>）。時代とともに翻訳市場の規模は拡大し、それとともに翻訳会社の数も着実に増加してきています。翻訳業は「お金」がなくても、「商売の才覚」がなくても、「知識と技術」さえあれば誰でも始められます。したがって、新規参入のしやすい業種といえるでしょう。それだけに無数の翻訳者と翻訳会社が、アメーバのように離合集散を繰り返しながら発展してきた業界とも言えます。

このように雨後の筍のごとく増えた、翻訳会社ではありますが、翻訳を発注する「ソースクライアント」にとっては、「優秀な翻訳会社」は常に足りないものです。同様に翻訳会社にとっても「優秀な翻訳者」は常に足りないのです。

したがって、翻訳会社にとって、「優秀な翻訳者」さえいれば受発注を増やすことは比較的容易なのですが、「需要のタイミングのミスマッチ」によって、そう簡単には「こと」が運びません。そういう面においても、Web戦略がとても重要になってくるわけです。